

した6例のうち3例ではFVPED(fibrovascular pigment epithelial detachment)を認めた。

【結論】治療開始前のCMEやフィブリン析出は網膜障害から視力低下につながる場合がある。経過中に発生したFVPEDは頻回治療を要する指標となり得る。

・セッション4

座長：植木麻里(大阪医科大学)

13. 兵庫医科大学における斜視に対するボツリヌス治療について

○古川達也, 三村 治, 木村亜希子, 増田明子,
中村由美子, 一色佳彦, 五味 文

兵庫医科大学

ボツリヌス毒素(BTX)注射は2015年6月に斜視に対して適応拡大が認められた。今回兵庫医科大学病院で斜視に対するBTX注射を施行し2か月以上経過を追えた41例を検討した。投与は、経結膜的には外来で筋電図を用いて外眼筋内に刺入を確認後に行う方法と、斜視手術の術中に手術用顕微鏡下に後転筋に投与する2通りで行った。全例BTX投与後眼位は改善し、その後効果は徐々に減少した。合併症としては眼瞼下垂が最多で8例で、気分不良が1例であった。本講演では最多を占めた輻湊痙攣患者と、術中BTX注射を行った複合神経麻痺後の内斜視患者の代表例の経過をそれぞれ供覧した。BTX注射は適応を選べば、斜視に対して有用な治療手段となり得ると考えた。

14. IgG4関連眼疾患の診断基準分類と臨床像

○渡辺彰英¹⁾, 山中行人¹⁾, 中山知倫¹⁾, 外園千恵¹⁾, 米田亜規子²⁾, 木下 茂³⁾

1)京都市立医科大学

2)町田病院(高知市)

3)京都市立医科大学感覚器未来医療学

【目的】IgG4関連眼疾患症例を診断基準に基づ

いて分類し臨床像について検討すること。

【対象と方法】IgG4関連眼疾患と診断した24例(男性10例, 女性14例, 平均年齢61.2歳)について, IgG4関連眼疾患診断基準に基づき確診群, 準確診群, 疑診群に分類し, 各群におけるMikulicz病の割合, 両側性の割合, ステロイド内服治療後の再発率について検討した。

【結果】両側性17例, 片側性7例で, Mikulicz病は6例であった。確診群は10例, 準確診群は7例, 疑診群は7例であった。再発率は確診群40%, 準確診群43%で, 疑診群は再発症例がなかった。

【結論】確診群および準確診群で再発率が高く, 診断基準分類は疾患の進行度または難治度を反映する可能性があると考えられた。

15. OCT Dacryography

○藤本雅大, 宇治彰人

京都大学

【目的】光干渉断層計を用いた涙道造影法(Optical Coherence Tomography Dacryography: OCTD)を開発し, 非侵襲的に涙小管の形態, 機能を評価した。

【方法】対象は正常被験者20例20眼。OCTはプロトタイプ機, 造影剤としてレバミピド点眼液を使用。点眼後, 1分ごとに涙小管を3次元撮影し, 水平部内径, 上皮厚の計測と点眼液が涙小管内から排出されるまでの時間を測定した。

【結果】涙小管水平部計測値, 排出時間は男女で有意な差は認めず, また排出時間と年齢, 涙小管水平部計測値とは明らかな相関関係は認めなかった。

【結論】OCTDにより涙小管の形態, 機能を非侵襲的に評価できた。

16. 涙道内視鏡併用涙管チューブ挿入術の術後成績